

優秀賞

『22世紀の民主主義：選挙はアルゴリズムになり、政治家はネコになる』
成田悠輔著、SBクリエイティブ、2022.

御堂 恭介（法学部 法律学科 3年）

本書は、停滞と衰退の暗雲が立ちこめる日本において、この状況の打開策を、選挙や政治、民主主義のルールを作り変えることによって導き出そうとするものである。そこでは、経済学や公共政策、アルゴリズムを研究分野とする著者が、ルール変革を通じて民主主義の再生・再発明を目指している。具体的には、民主主義が劣化しているということを現状として認識し、民主主義との闘争、民主主義からの逃走、まだ見ぬ民主主義の構想といった案を検討することで、民主主義の改造と政治参加の拡大に向かう様々な戦略や構想を示している。現実の政治に興味を持ってないという著者が行う提案は、既存の形態にとらわれない点で、新たな民主主義を考察する際に有用的であると考えられる。

著者によると、若者が選挙に行き政治参加をしたくらいでは何も変わらないという。それより選挙や政治、民主主義のルールをどう作り変えるか考えることが大切である。今世紀に入ってから、民主主義の劣化が世界的に進んでおり、さらにその加速度が特に大きいのが民主国家であることがわかっている。そのような中、民主主義が今世紀を生き延びるために必要なことは、次の姿への脱皮であり、そのために民主主義との闘争、民主主義からの逃走、そして新しい民主主義の構想が提案されている。

第一の「闘争」は、現状と愚直に向き合い、問題と戦うことであり、第二の「逃走」は民主主義を見捨てて外部へと逃げ出してしまおうという考え方である。著者は第三の「構想」を特に重視するが、それは今日の世界環境を踏まえた民主主義の再発明であり、アルゴリズム技術環境を利用した選挙の更新である。これは「無意識データ民主主義」と呼ばれる。インターネットや監視カメラなど、選挙に限らない無数のデータ源から民意を汲み取り、アルゴリズムによって意思決定を行う。そこではエビデンスに基づく目的発見と政策立案が可能であり、具体的な民意を汲み取りにくい選挙は、あくまで数あるデータ源の一つになる。またそれは、国民の自動的で日常的な政治参加が可能であり、具体的で詳細な民意までを政策立案に反映させることができるシステムでもある。

現代の通説からは想像もできないようなアイデアが多く提案されている本書を読み、民主主義の捉え方の幅が広がったように思う。「無意識データ民主主義」については国民が半強制的に政治参加をすることとなるため、政治に参加しない権利を国民が有すると考えるなら、問題点はあるともいえる。いずれにせよ、通説にはそれが通説たるゆえんがあり、そのことに留意した上で、時には常識を疑い、そこから離れた見方をすることも必要であろう。若者の政治離れが問題視される現代において、発展した科学技術を取り入れるなど、民主主義のあり方をアップデートしていくことは、「政治とは一部の大人がやるお堅いもの」というイメージからの脱却に繋がるのではないだろうか。